

UDC の活動を通じた公民学連携による地域のデザインとマネジメント

Urban Design Center Public-private-academic Collaboration in Spatial Design and Management

前田英寿¹⁾
Hidetoshi MAEDA

1) 芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科, 教授, 博士(工学) (東京都港区芝浦 3-9-14, maeda-h@shibaura-it.ac.jp)
College of Engineering and Design, Shibaura Institute of Technology, Professor, Dr. Eng

This paper pursues sustainable methods for urban design centers in Japan. Nine years have passed since Urban Design Center Kashiwano-ha, officially titled 'urban design center', started public-private-academic collaboration 2006 in Kashiwa City, Chiba Prefecture. Among followers across the country are Urban Design Centers of Fukuoka Island since 2010 and Matsuyama since 2014 as well as the Kashiwano-ha, testifying contribution of universities organizing the collaboration, indispensability of full-time experts operating the centers, and significance of places accommodating the centers.

アーバンデザインセンター, 公民学連携, 常勤専門家, 拠点施設
Urban design center, public-private-academic collaboration, on-site expert, on-site center

1. はじめに

本稿は各地のアーバンデザインセンター (以下 UDC, Urban Design Center) の動向を通して地域のデザインとマネジメントにおける公民学連携の要点を考察することを目的とする。2006 年 10 月柏の葉アーバンデザインセンター (以下 UDCK, Urban Design Center Kashiwano-ha) が「アーバンデザインセンター」を正式名称に掲げて 9 年になる。2015 年 3 月 7 日 UDCK 主催の第 3 回アーバンデザインセンター会議 (以下、第 3 回 UDC 会議) によると同じ主旨の組織は 9 カ所となった (表 1)。UDC を運営するコストを整理するには十分な実績である。筆者らは UDCK 設立と同時に世界各地の事例研究を始め、UDC の普及に向けて 3 項目からなる定義を導出した (①連携による空間計画、②専門家による主導、③拠点と見える化)¹⁾。この定義は UDC が起動する要件としていまも必須と筆者は考えている。本稿では一歩進めて UDC が持続する仕組みを各地の事例から検討したい。

2. 事例 3 カ所の概要

本稿は柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK)、アイランドシティ・アーバンデザインセンター (UDCIC)、松山アーバンデザインセンター (UDCM) を比較検討する。第 3 回 UDC 会議に参加した 9 ケ所のうち「アーバンデザインセンター」を正式名称に含むのが 7 ケ所、センター長が異なるのがこの 3 ケ所である。準備着手から UDCK が 9 年、UDCIC が 6 年、UDCM が 2 年経った。この 3 カ所は地域も文脈も異なる中で時間差を生かして情報交換し、経験と知見を相互に蓄えてきている (表 2)。

柏の葉アーバンデザインセンター UDCK

UDCK はつくばエクスプレス (2005 年 8 月東京秋葉原～茨城つくば開通) 沿線千葉県柏市北部の鉄道一体型土地区画整理事業を中心とした 13 km²のまちづくりを推進するために 2006 年 10 月に設立した。柏の葉キャンパス駅前に拠点を置き、柏市、柏商工会議所、地元町会連合、地域内にキャンパスを構える東京大学と千葉大学、開発を手掛ける三井不動産、つくばエクスプレスの運営会社、以上の公民学 7 団体が共同運営して近く 9 周年を迎える。

アイランドシティ・アーバンデザインセンター UDCIC

UDCIC は福岡市博多湾アイランドシティ事業を推進する組織として 2010 年から準備して 2012 年 10 月に設立した。アイランドシティは 1994 年から埋立てが始まり、全 4 km²のうち西半分の港湾地区に先行して東半分の市街地地区が 2005 年まちびらきをした。UDCIC はこの市街地地区 1.92 km²に取り組み、中心部のオフィスビル地上階に拠点を置いている。福岡市、地元立地企業団体、地元校区住民団体、市内にキャンパスを構える 4 つの大学、以上の公民学 7 団体が共同運営するアイランドシティ・アーバンデザイン協議会の実務チームとして動いている。

松山アーバンデザインセンター UDCM

UDCM は愛媛県松山市 JR 松山駅から伊予鉄道松山市駅そして道後温泉に至る中心市街地のまちづくりを推進する組織として 2014 年 4 月に設立した。拠点を松山市駅に近い銀天街商店街に置いている。松山市、商工会議所、伊予鉄道、地元まちづくり会社、市内にキャンパスを構える 4 つの大学、以上の公民学 8 団体が共同運営する松山都市再生協議会の実務チームとして機能している。

表1 第3回UDC会議に参加したUDC

設立年月	名称	略称
2006.10	柏の葉アーバンデザインセンター Urban Design Center Kashiwanoha	UDCK
2007.3	アーバンデザイン会議九大 Urban Design Center Kyusyu University	UDCQ
2008.8	アーバンデザインセンター横浜 Urban Design Center Yokohama	UDCY
2008.8	田村地域デザインセンター Urban Design Center Tamura	UDCT
2008.11	郡山アーバンデザインセンター Urban Design Center Koriya	UDCKo
2012.10	アイランドシティ・アーバンデザインセンター Urban Design Center Island City	UDCIC
2014.3	並木ラボ Urban Design Center Namiki	UDCN
2014.4	松山アーバンデザインセンター Urban Design Center Matsuyama	UDCM
2015.4	柏アーバンデザインセンター Urban Design Center 2	UDC2

表2 3事例の概要

	UDCK	UDCIC	UDCM
動機	新線開通ともなう駅周辺区画整理	港湾埋立地における新市街地建設	中心市街地活性化
沿革	準備着手 2006.6 組織設立 2006.10 拠点開設 2006.11	準備着手 2010.4 組織設立 2012.10 拠点開設 2012.10	準備着手 2014.2 組織設立 2014.4 拠点開設 2014.11
組織	任意団体 キャンパスタウン構想の実務チーム	大学所属 アイランドシティ・アーバンデザイン協議会の実務チーム	大学所属 松山都市再生協議会の実務チーム
公	柏市	福岡市	松山市
民	三井不動産 首都圏新鉄道 柏商工会議所 地元町会連合	地元立地企業団体 地元校区住民団体	伊予鉄道 松山商工会議所 まちづくり会社
学	東京大学 千葉大学	九州大学 九州産業大学 福岡女子大学 福岡工業大学	愛媛大学 松山大学 聖カタリナ大学 松山東雲女子大学
拠点	対象地域主要駅前 東京大学施設1階	対象地域中心部 オフィスビル1階	対象地域商店街 共同ビル1階



写真1 UDCK 初代拠点施設



写真2 UDCK 現在の拠点施設



写真3 UDCICの拠点施設



写真4 UDCMの拠点施設

3. 地域の将来計画

地域のデザインとマネジメントとは行政、企業、市民が利害を越えて将来計画を共有し実行することであり、ここに公民学連携の意義がある。

UDCKはキャンパスタウン構想の実務チーム

UDCKが9年間活発である最大の理由は地域の将来計画『柏の葉国際キャンパスタウン構想』（以下、キャンパスタウン構想）を主導してきたことにある。キャンパスタウン構想は千葉県、柏市、千葉大学、東京大学が2006～2007年度の調査を経て2008年3月策定した。2008年度から実施、2009年度からUR都市機構と三井不動産が加わり、2013年度充実化版に改訂された。策定主体から選ばれたキャンパスタウン構想委員会が設けられ、正副委員長は東京大学及び千葉大学教授が務めている。

UDCKはこうした利害の異なる主体の中で調査から策定そして実施に至る全過程の作業事務局を担っている。UDCKは本質的にはキャンパスタウン構想の実務チームであり、拡散して見える多彩な活動も全てキャンパスタウン構想の部分や連関である。すなわちUDCKは公民学いずれの主体にも属さずに公民学各主体が共有する将来計画の実行を司っているのである。

この建て付けがキャンパスタウン構想とUDCKに命を吹き込んだことは関係者が認めることである。策定主体6者は費用分担を続け、柏の葉地域で行う事業のほとんどをキャンパスタウン構想と関係づけている。公的補助事業や民間ビジネスの誘致においてもキャンパスタウン構想にもとづく公民学連携の実績とその実務を継続的に担うUDCKの存在が高く評価されている。

地域が将来計画を策定する意味

UDCICにおいてキャンパスタウン構想に相当するのが『アイランドシティにおける公民学連携のまちづくり活動指針』（アイランドシティ・アーバンデザイン協議会2014年6月策定）である。名称が「活動指針」であり、策定主体がアイランドシティ・アーバンデザイン協議会すなわちUDCICの母体である。UDCICが自らの活動指針を定めたという位置づけである。その背景にはアイランドシティの将来計画は福岡市の港湾計画の中で既に定められているという事情があるのだろう。UDCMでも地域の将来計画の策定を検討中であるが、既存の都市計画マスタープランや中心市街地活性化計画と役割分担の論理整理が必要であるように見受けられた。

柏の葉地域においてもキャンパスタウン構想以前に『緑園都市構想』（柏市2006）と『柏・流山地域国際学術研究都市づくり事業』（千葉県2003～）が既に定められて実施中だった。時間が経って基盤整備から建築整備さらには市民生活が始まる段階に至り、広い主体が関わって次の将来計画が必要であると了解されてキャンパスタウン構想が着手された。このように事業が進捗して主体が増えた段階で計画を追加するのはむしろ合理的であり、そこにUDCの公民学連携を生かすべきである。

4. 大学の参加

地域という公共空間を扱う UDC に学術機関である大学の参加は不可欠であり、そのためには大学と地域を実質的につなぐ仕組みが必要となる。

大学と UDC の関係

東京大学と千葉大学は当初から構成団体として積極的に UDCK に関わっているものの、UDCK は大学の機関ではない。常勤の副センター長とディレクターは非常勤講師または特任研究員にすぎない。両大学とも地域内にキャンパスを構える地権者かつ事業者という立場であることは、キャンパスタウン構想の策定主体に名を連ねて費用を負担していることから明らかである。

UDCIC と UDCM は大学に属する。UDCIC は公民学 7 団体からなるアイランドシティ・アーバンデザイン協議会の実施チームである。当協議会は福岡市の負担金を九州大学産学連携機構に委託し、当大学機構が UDCIC の人件費と活動費を執行する。UDCM は公民学 8 団体からなる松山市都市再生協議会の実施チームである。当協議会は松山市の負担金を愛媛大学社会連携推進機構に委託し、当大学機構が UDM の人件費と活動費を執行する。

学生の関わり

UDCK における学生の関わりは『都市環境デザインスタジオ』である。つくばエクスプレス沿線の東京大学、千葉大学、東京理科大学、つくば大学が共同開講する大学院演習である。柏の葉地域を課題にして講演や発表を UDCK で行っている。UDCK が学生の提案を地元の企業や住民団体に紹介して実現した例もある。UDCK 自体を研究論文に取り上げた例もある。UDCIC も構成団体の大学教員が担当する授業や研究でアイランドシティを取り上げ、講習会や展覧会を UDCIC で開いている。

UDCM での学生は今のところ運営補助のアルバイトである。教育・研究と切り離しているのは常勤者が大学に職位（副センター長：教授、ディレクター：助教）を持つものの UDCM 特任のため授業や研究室を担当していないからだろう。その反動か、公募の「アーバンデザインスクール」の受講生の過半を学生が占めている。

キャンパスの立地

同じように大学に属する UDCIC と UDCM を比較するとキャンパスの立地に差がある。UDCIC の 4 大学はいずれも対象地域にキャンパスを持たないものの、九州大学新キャンパスのアーバンデザイン会議九大（UDCQ）や天神地区のエリアマネジメントなど UDC と主旨をともにする組織が市内各所にある。UDCM では主導的大学を含む 2 大学が対象地域内にあり、他 2 大学は郊外に立地する。福岡市も松山市も公共交通に恵まれたコンパクトシティである。ネットワーク型かつツリー型か市域全体へ UDC の活動を広げることも考えられる。

大学が媒介するトライアングル

最後に大学が公共と民間の間に介在する効果に言及したい。UDCK において柏市と三井不動産の貢献は多大で

ある。両者の良好な関係が都市開発における事業進捗とコミュニティ形成を両立させている。これが 9 年続いているのは両者の間に大学が介在してトラス構造が成立しているからだ。両者の意思疎通に問題が起きたり便益に不均衡が生じた時、身近にある大学が第三者の立場から事情を斟酌して指導助言してバランスが図られる。

5. 専門家の常勤

第 3 回 UDC 会議の 9 カ所の内 5 カ所に専門家が常勤している。立場の異なる公民学各主体に公平かつ柔軟に対応するには高度な知見と技術と人徳が不可欠である。UDC が不安定な組織であることは否めず、専門家の雇用は容易でない。3 カ所の実態をみる。

持ち寄り型

UDCK では主な構成団体である柏市（公社）と三井不動産が個々に雇用した副センター長 1 名とディレクターが数名常勤している。UDCK 本体に会計がなく人件費も活動費も各構成団体が持ち寄っている。常勤者は個別雇用だからこそ逆に公平な求心力がはたらいっているように見受けられる。この常勤者の内アーバンデザインの専門家は副センター長 1 名とディレクター 1 名である。建築設計または都市計画の実務経験を経て着任した。キャンパスタウン構想の事務局の他、公共施設整備や民間建築開発に対する指導助言に力を発揮している（図 1）。

大学所属型

UDCIC と UDCM とも大学の社会連携機構が市の負担金を使って専門家を雇用して UDC に派遣し活動費を執行している。これによって UDCIC は 3 名、UDCM は 4 名常勤している。その中にアーバンデザインの専門家も含まれる。これら常勤の専門家は大学所属でもその業務には資金元の市の意向が影響して、関与が公共施設整備と市民活動支援の両極に偏って建築整備に及びにくいように見受けられた。たとえばアイランドシティには公共空間のデザインガイドラインがあるが建築にはガイドラインもレビューシステムも今のところない。

行政とのつながりが強いことによる良い面は実体的な影響力を持てる点にある。松山では一番町大街道口アーケード改築工事において土木コンサルタント会社による実施設計の途中に UDCM が進言して著名デザイナーの助言を受け景観に配慮した形態になった。このように慣例的な計画設計の過程に UDC がデザインの理解者かつ市民の代弁者として介在してよりよい都市空間の実現に導く場面は益々増えるだろう（図 2）。

変化の継続

常勤専門家は UDC の要となる役職である。将来計画の実施に係る作業、スタッフの管理、センター長の代理など複数の顔を持つ。3 カ所とも実務経験者または博士學位取得者がセカンドキャリアとして常勤の副センター長またはディレクターを務めている。官公庁や企業と比べて UDC に求められるのは確実性より挑戦、安定より

機動性、成熟より新鮮さである。常に変化が求められる中で UDC が持続するためには常勤者に任期を設けるのも一策であろう。UDCK 初代常勤の副センター長とディレクターは 2007 年着任時に当時のセンター長に任期 3 年を告げられ 2010 年両者とも大学に転じた。UDCIC では準備期間から数えて 5 年経過した 2015 年度からセンター長と常勤副センター長が異動した。



図1 持ち寄り型UDC

図2 大学所属型UDC

6. 広場のような拠点施設

UDC の拠点施設が対象地域の目立つ場所に開いた形であるべきであることに異論はなからう。3カ所ともそうになっている。筆者は仮設建築の初代 UDCK に 3 年勤め、柔軟に使える単独棟が公民学連携の自由な活動にふさわしいと思ってきた。本稿を書くにあたって UDCK、UDCIC、UDCM を実見してその思いを改めつつある。

UDCK は東京大学の駅前校舎、UDCIC はオフィスビル、UDCM は共同ビルというように現在全てがテナント入居している。3カ所の違いは外構にある。UDCK は西面にホテルや商業施設と囲む中庭、南面に道路境界からセットバックしたデッキ敷き空地があるが、いずれも人通りがあって UDCK が専用できる余地は小さい。UDCIC の前面には駐車場があって道路から隔離している。

UDCM はアーケード商店街脇の道路を介して広場をとまなっている。公園不足の中心商業地に空地を探したらここに駐車場があってそれに面するビル 1 階 2 階の空室とともに松山市が社会実験として拠点にしたようだ。

三方囲まれて道路に開く UDCM のアルコーブ状広場が好ましく感じられた。買い物の合間に広場で一休みして斜め向かいの UDCM に興味をもって覗くといった段階的なアクセスが容易に想像できる。広場と一体の空間構成は共同ビルと単独棟の違いこそあれ UDCK 初代と同じだ。通学通勤の駅前前で時間をつぶす時に広場に来て気が向けば UDCK に入館してくる市民や来街者が数多くいた。イベントや交流会はもとよりユニットハウス 8 基を仮設した「小さな公共空間 PLS」のような社会実験にもこの広場を活用した(写真 5・6、図 3・4)。

建物内部では多目的空間の有無が肝となる。初代 UDCK と UDCIC では事務室以外は一体の多目的空間で、その中に図書、談話、都市模型が据えられている。現在の UDCK には談話や会議の空間は十分あるが什器は半

ば固定されている。UDCM では少人数グループ用にテーブルと椅子が数多く配置されている。これらは多目的空間とはいえない。多目的空間は都市の広場に似て、実験的な企画を気軽に受容するとともに日常活動に余裕を与えるものでなくてはいけない。活発さとその見える化を旨とする UDC において建物内外に広場のような多目的空間を備えることは本稿で述べた地域の将来計画、大学の参加、専門家の常勤と並ぶ重要な資質ではないだろうか。訪問調査時に 3カ所とも都市模型が来館者の目に入りやすい場所になかったのは残念に感じた。



写真5 UDCK 初代の広場



図3 UDCK 初代の建物と広場²⁾



写真6 UDCM の広場

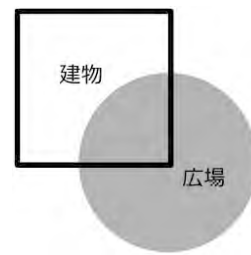


図4 UDCK 初代と UDCM の建物と広場

7. おわりに

UDC がこれまで注力してきた市民啓発、情報発信、公開講座、アートイベントなどいわばアーバンデザインの可視化は定番に確立した感がある。本稿はそれらに触れず、UDC の根幹にあつてその持続を左右する地域の将来計画、大学の参加、専門家の雇用、拠点施設のあり方について現地調査から考察した。3カ所を実見して改めて UDC の魅力は「開かれた場」であることだと得心した。開かれた状態を維持するのは容易でない。本稿が報告した各地の経験と実態が参考になるのではないだろうか。

謝辞

本稿を書くにあたり第 3 回 UDC 会議(2015.3.7)の後、UDCI(2015.6.1)、UDCM(2015.7.6)、UDCK(2015.7.10)に訪問調査を行いました。御多用中ヒアリングに応じていただいた方々に御礼を申し上げます。ホームページやパンフレットを確認して正確を期したつもりですが、謝りがあつたらそれは筆者の理解不足によるものです。

参考文献・出典

- 1) アーバンデザインセンター研究会：アーバンデザインセンター 開かれたまちづくりの場、2010 年 9 月、理工図書
- 2) 日本建築学会編：コンパクト建築設計資料集成都市再生、丸善 2014
- 3) 柏の葉アーバンデザインセンター <http://www.udck.jp>
- 4) アイランドシティ・アーバンデザインセンター <http://www.udcic.jp>
- 5) 松山アーバンデザインセンター <http://udcm.dmi.chime-u.ac.jp>